

<「知るっば！久留米」 令和3年8月26日（木） 12：30～放送分>

## 久留米入城400年 ～第4回～ 「久留米市街地の基礎を築く」

<ゲスト：久留米市文化財保護課 白木 守>

坂本 MC（以下「坂本」）

「知るっば久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

8月は、『久留米入城400年』をテーマにお送りしています。ゲストはこの方です！

ゲスト：白木さん(以下「白木」)

久留米市文化財保護課 白木守です。

坂本 4回目の今日は、『久留米市街地の基礎を築く』についてお話を伺います。

これまで久留米城の本丸や武家屋敷について詳しく語っていただきました。

今週は、どのようにして城下町がつくられ、発展していったのか伺っていきます。

白木 まず、防御の役目という武家屋敷が真っ先に思い浮かぶんですが、実はお寺もそうなんですよ。

豊氏は城を建設するにあたり、「ここを城内と定める」という地区にあった寺を東に移転させます。

さらに久留米藩領内の寺院も移転させたりして、寺町を東の防衛拠点としました。

ですので、実は寺町も建設が開始されてから、今年で400年という節目を迎えているんです。

坂本 武家屋敷とお寺が、セットで防御の役割を担っていたということですね。

だから、あのあたりにお寺が密集しているんですね。とても勉強になります。

白木 そして、武家屋敷によって挟まれた範囲に、町人の町である町屋が建設されます。

現在の通町（とおりまち）にあたる部分、ここは江戸時代には長町（ながまち）と呼ばれていました。

田中の代には4丁目までしかつくりだされてなくて、今の日吉小学校の北西側あたりまででした。

ここを豊氏はさらに東へ伸ばし、寛永11（1634）年までに6丁目、

さらにその7年後には8丁目まで、つまり寺町の南側まで町を伸ばしています。

坂本 東へ、東へと町屋が伸びていく。

絵地図を見ると、寺町の南東にあたる9丁目からは北の方へクッと曲がっている感じがしますね。

白木 これは城下町特有の造りで、太平の世とはいえ侵入を簡単にさせないための工夫で、

カギの手状に造られています。

ですので、10丁目になると、再び東へと伸びて、城下への入口にあたる部分、

およそ西鉄天神大牟田線の東側には、東方からの人やモノを管理するための番所が

設けられていたんですよ。

坂本 なるほど、そこらあたりは、久留米を代表する有名なラーメン店の本店あたりですね。  
幕末の偉人の井上传や田中久重の生家もそのあたりとお聞きしています。

白木 田中久重さんの生家が10丁目にあって、ちょうど今の西鉄の高架下に生家の碑が立っています。  
井上传さんの生家は、そこから東へ約200メートルの通外町(とおりはかまち)で、  
2人はご近所さんです。  
年齢は伝さんが11歳上なので、一緒に遊んだということはないと思いますが、  
近くにある五穀神社には2人の胸像が並んで立っています。

坂本 からくり儀右衛門こと田中久重については、この番組でも4月に取り上げてもらったところですが、  
さて、そのほかの町屋についてはどうだったんでしょうか？

白木 今は通町の話をしました、延宝8(1680)年の久留米城下図が残っています。  
これを見ると、西側は水天宮通りから瀬の下あたりまで、  
南は本町7丁目あたりまで町屋が広がっているのが分かります。  
その後小頭町から花畑方面へ抜ける町家が建設されていっているという感じですね。

坂本 なんとなく、城下町がだんだん広がっていくイメージが湧きますね。  
となると、次に大事になってくるのが道路ですが、当時の道路事情はどうなんでしょう？

白木 まず、市役所の東に某回転すしチェーン店がありますよね。  
ここの前に「札ノ辻(ふだのつじ)」という石碑が立っています。  
「札ノ辻」というのは、江戸時代、新しく制定された法令などを広く周知するための  
高札場(こうさつば)があったところなんです。  
こういうのが置かれていたということは、  
当時、人がたくさん集まっていた場所というのがわかります。  
柳川往還の起点にもあたるので、ここを中心にして領内の町や村、  
あるいは他藩と結んでいく道路が放射状に伸びていったわけです。

坂本 とても大事な交通の起点ということですね。  
市民のみなさんには、図書館の旧西分館があった所といった方が分かりやすいでしょうか。  
その前に柳川往還の名残があるんですよ。

白木 戦前まで、メインの通りだったんですが、西分館の前に「ふちいし」という縁石が、  
今でも長さ12メートルほどにわたって残っています。  
そして、ここから南へ約4キロの場所の安武町には、「目安の一里塚」が残っています。

坂本 いわゆる僕たちが「柳県(やなけん)」と呼んでいる道路(柳川県道)で、  
柳川城と久留米城とを結んでいたんですね。この前、大塚さんの回にも少し出てました。

白木 ここが西鉄電車でいうと津福駅あたりから南の柳川に向かってほぼ直線に、  
線路に沿うような形で県道が走っています。  
この県道は、田中の代につくられたものですが、有馬の代になっても非常に重宝されて、  
俯瞰的(ふかんてき)に見ると、一直線に最短距離で結んでいるというのがよくわかります。

坂本 400年以上も前につくられた道が、今でも変わりなく利用されているのは、  
驚きと共に、歴史の重さも感じますね。  
そして、市街地の地名も古い名残のあるものが多いですね。

白木 そうですね。かつて明け方と夕暮れの六つ時、今で言うと朝と夕の6時くらいに、  
城下への出入りの門の開閉がされていた場所に「六ツ門」という名前がついております。  
あるいは、バス停の「荘島」や「築島」のように島のつく地名は、島状の高まりがあった場所ですし、  
池町川にかかる橋にも「三本松橋」や「米屋橋」「田町橋」といった古い町名を見ることができます。

坂本 今放送させてもらっているこのスタジオも六ツ門ですね。  
そういう古い地名が使われなくなり、やがて忘れ去られていくのは寂しいものがありますね。

白木 京都が分かりやすいんですが、本来は道路、つまり道筋そのものが町でした。  
「向こう3軒、両隣」なんて言葉がありました、  
今となっては、道路は町を隔てるものになってしまいましたね。

坂本 時代と共に町は変化していきますからね。  
ところで、今の市街地の骨格が完成したのはいつくらいでしょう？

白木 「何年に完成した」と断定はできませんが、初代藩主の豊氏から4代藩主・頼元にかけて、  
大体80年ほどかけて、おおよそ現在の町の骨格が完成したと考えられています。

坂本 80年とはまた、時間がかかったというか、着実に進めたというか、そういう感じですよ。

白木 今と同じなんですが、財政的な問題が最も大きかったと思いますね。  
有馬が治めた250年間のうち、およそ3分の1が町づくりに当てられたことになるわけです。  
そして明治22年、久留米市が日本最初の市のひとつとして誕生した時の久留米市の範囲が、  
この城下町の範囲なんですね。

坂本 話は尽きませんが、お時間となりました。  
来週から『久留米入城400年』後半戦になります。お楽しみに！